

1 版画指導について

頓原小学校勤務以前、私はおよそ20年間中学校勤務で美術を担当していた。そこで感じていたことは、単色木版画に取り組もうとすると「また一、版画？」と、木版画に抵抗を示す生徒が意外に多いことだった。その主な理由は「彫刻刀でどんなふう彫れば良い作品になるのかわからない」とか「長時間彫ると手が痛くなる」、「刷りで汚れるのがいや」というものだった。そこで小学校の図工では、木版画へのそうした抵抗を感じさせないようにする手立てが大切であると感じていた。そのためには、子ども達に導入段階で、予め木版画の特色や良さを参考作品等を通して感じさせ、「こうすれば、あんな作品ができるのか。」と版画制作の手順を理解させて学習に取りかからせること大切である。そうすれば、子ども達も毎時間の学習課題を明確にして楽しみながら学習できるであろうと思われる。



版画の表現法は多種多様にある。発達段階を考えると低学年では紙版画や板紙凸版を扱い、3年生で少し表し方を変えてスチレンボードや板紙によるドライポイント(凹版)を経験するという取り扱いが、安全面や技術面を考えたとき適切であると思われる。学習指導要領では4年生から木版画を取り扱うことになっている。4年生以上で単色木版画を取り扱い、高学年では単色木版画を応用した作品づくりや一版多色木版画、あるいはリトグラフ(平版:石版にインクをはじく特殊液を塗った上にクレヨン等で絵を描いて刷る版画で、描いたとおりに写る)等を学習すると、様々な版画を経験して、ちがいや面白みもわかってよいと思われる。

私は今年度、4年生(自分の学級)と5年生の図工の授業を担当して指導した。版画については両学年とも単色木版画を取り扱った。5年生では画面構成や彫りを発展的に取り入れた。


4年生(10名)は彫刻刀を使うのは初めてだが、木版画に対する抵抗は全くなく、彫刻刀を使って表現してみたいという期待感がとても大きかった。子ども達が楽しく版画に取り組めるようにするために、まず、題材をわかりやすく、とらえやすいものにし、身近な学校生活の中から「リコーダー練習をする友達」や「本を読む友達」と設定した。そして、子どもたちが題材を下絵で表すのに能力差や時間差が大きく出ないように、定められた短時間内に人を描くクロッキー(速描写:4人グループで交代でモデルをし、1人1ポーズを15分の制限時間内にスケッチすること)の方法を取り入れた。4年生では人物のポーズのみを画面構成に取り入れさせ、彫りですまづかないよう版下段階で白黒の構成をしっかり描きこませた。その後基本的な彫り方を教えて、その都度評価しながら学習させることによって、ほとんど失敗もなく一連(下絵→版下作成→彫り→刷り)の学習を進めることができた。

5年生(15名)については、木版画は今年が2回目であったが、版画制作を楽しみにしている様子であった。5年生では人物のポーズだけでなく背景も画面構成の要素として意識させ、彫りにも陰影を入れて発展的に表現させた。5年生の子どもたちはクロッキーは初めてであったが、4年生と同様にクロッキーとその後の一連の学習にとっても意欲的に取り組んだ。そしてどの子も各自の作品を完成することができた。

各自が刷りあげた複数の作品は、全員1枚を2008年のカレンダー台紙に貼って教室で鑑賞し合い、その後、各自家に持ち帰ることにした。

版画の種類	単色木版	学校名	飯南町立頓原小学校	指導者	伊藤 美和
題材名	笛の練習（または読書）をしている友達		学年	4年生 (5年生)	時間 12時間
<p>題材のねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> 彫刻刀を使って彫ったり、刷ったりする活動を楽しもうとする。 生活の一場面から木版画で表すための下絵を描き、表したい思いが伝わるように彫り方を考える。 					
版画の特徴	<ul style="list-style-type: none"> 児童に、彫刻刀で彫って表すことの楽しさを味わわせることができる。 単色木版画による表現の仕方としては、基本的に次の三通りがある。初めに、自分は白と黒の部分をどんなふうに表示したいかなどの構想を持たせておくといよい。 <ul style="list-style-type: none"> ①陰刻 …… 主として表したいもの(人や動物等の主体)を線彫りなどで彫って表す。 ②陽刻 …… 主として表したいもの(人や動物等の主体)の周囲を彫って、主体を黒っぽく表す。主体の中には必要に応じて、線彫り等で表す。 ③陰陽の組み合わせによる彫り …… 陽刻を基本とし、主体に陰影（白や黒）をつけて細部を立体的に表す。 <p>②の例</p>  <p>②に③を組み合わせた例</p>  <ul style="list-style-type: none"> 単色版画は、描画等の色をつける作品に自信を持ってない子どもには、色使いによる個人差がないので、抵抗が少なくよい。 				
準備	<p>(指導者) ・下絵用紙（コピー用紙等）、カーボン紙、セロテープ</p> <ul style="list-style-type: none"> 版木、版画台板、版画用紙（鳥の子紙、奉書紙など）、軍手5～6組（Sサイズ） 版画用具一式（中性版画インク、インク練り板、ローラー、インク練りペラ、バレン） <p>(児童) ・彫刻刀、水性黒マジック、赤ボールペン</p>				

2 授業の流れ

児童の学習活動	指導上の留意点
<p>【下絵のためのクロッキー】</p> <ul style="list-style-type: none"> 4人グループを作って、一人ずつ順に15分間「リコーダーの練習をする人」か「読書をする人」のモデルになり、互いにクロッキーで絵を描き合う。 <p>一人が3枚描けるので、その中から1枚を選び、版画の下絵にできるよう目鼻や腕、指など詳しく描く。</p>  <p>【下絵の画面構成】</p>	<ul style="list-style-type: none"> クロッキーについては前もって、頭と胴体の中心線、顔の傾き、本や楽器の大まかなアウトラインなどの描き方のコツを描いてみせておく。 上半身のポーズが大まかに描けるまでは、目や鼻の詳細は描き入れないようにさせる。人物クロッキーでは頭部・上半身・上腕・下腕・手の甲…という捉え方が大事である。

- ・目鼻や指づかいなどの細部の表現を描き足す。指づかいなど見ないとわからない場合は、数分間、動作をしてもらうなどして詳しく描き加える。
- ・（5年生は背景をこのとき描き入れる。…窓、カーテン、本棚、窓の外に見える木等）

【下絵の転写】

- ・下絵を版木に重ね合わせ、間にカーボン紙をはさんで、赤のボールペンでなぞって下絵を転写する。
（時々、下絵のすき間から写っているかのぞいて見る）

- ・特に表情や動作は版画に重要な要素となるので、クロッキーの後、少し時間を与えて彫りの図案として詳しく描かせた方がよい。

- ・転写は黒の鉛筆で写すと、途中でどこまで写したかわからなくなるときがあるので、赤ペンの方がわかりやすい。

【版下の白黒構成】

- ・彫らずに黒く残しておきたい部分は、版木に移した下絵（版下）に、直接黒のマジックインクで黒く塗っていく。顔などを白っぽく表したい場合は、ほほのふくらみなど顔の立体感が出るように、鉛筆等で直接版木に線を書いていく。



（5年生の版下例）

【彫り】

- ・まず、絵の主体である人物の外周を丸灯で外側に向けて小刻みに彫っていく。彫りかすが目安として1センチ以上にならないように細かく彫っていく。
- ・黒と黒が重なり合う部分に境界線を入れたい場合でも、三角刀は極力使わず、平刀ですかし彫りのように表す。

【刷り】

- ・版木にインクをつける際、両手に軍手をはめてインク練り板でよく練りこんだインクをローラーにつけ、縦にも横にもローラーを動かしてインクをつける。



（5年生の作品例）



（5年生の作品例）

- ・刷りは各自自分で行う。バレンを紙の中央に置き、中心

- ・黒い部分が6～7割になるよう構想を練らせる。彫る（白くする）部分も表したい思いを伝えやすくするために、彫り方がわかるように彫りの方向などを版木にマジックで書き込んでおく。そうすることで計画的な構成ができ、彫るときも間違えにくくてよい。

- ・彫刻刀の安全な使い方を徹底させたい。右利きの場合、鉛筆で字を書く持ち方で右手に彫刻刀を持たせる。左手の人差し指を金属の刀の付け根にそえさせて両手の付け根部分で板を押さえれば、彫りの方向や力の調整がしやすく、怪我もしにくい。

- ・刷る前に彫りかすが版木の表面についていないようにしておき、紙の表の端に記名させておくと表・裏をまちがえにくい。

- ・ローラーは必ず版木の端から反対の端まで転がすようにさせる。

- ・1回目の刷りは新しい版木がインクを吸収するので、写りがうすくなる場合が多い。

- ・バレンの表面に亀裂が入ったら使わない。（作品に傷がつくので廃棄する）

- ・紙は鳥の子紙（真っ白と黄味がかったものがあるが、好みでよい）くらいの

<p>から周りに放射状に刷っていく。</p> <p>【台紙に貼る】</p> <ul style="list-style-type: none"> 作品の周囲を5～8ミリ残してカットし、裏に糊付けして台紙に貼り付ける。 <p>【鑑賞する】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学級で互いに鑑賞し合ったり、校内で掲示して鑑賞したりする。 	<p>厚みがある方がよいと思われる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 版画は何の種類であれ、版の縁（プリントマークと言って、版画の命とされる）が必ず6ミリ程度入るようにカットする。
---	--

3 発展

単色の版画作品は複数刷るので、その内の1枚は水彩で着色してデザイン的な作品にするなど発展的に取り扱うことができる。

4年、5年と単色木版画を経験したら、3年目は「また、白黒木版画か。」という気持ちになる子どももいるかもしれない。そこで、6年生では、一版多色木版画あるいはリトグラフ（前述）などを経験させると、新しい方法で新鮮さを感じることができるかもしれない。

さらに中学生になれば、時間数の削減等で制作時間を十分にとれない場合が多いので、エッチング（凹版：銅版にグラント液を塗って、ニードルでひっかいて表す）のような手のひらサイズの版に心象表現をする小作品へと発展させていくことも期待できる。